

# 韓国の異郷訪問譚の構造

依田千百子

## 一、はじめに

民話のシンタクマティックな形態論的研究がプロップによって開始されて以来、今日まで多くの研究者によつて受け継がれ、修正がなされたのは周知のことであるが、特にルーマニアのミハイ・ポップは興味深いモデルを提出している。<sup>(1)</sup> ポップの研究の紹介とその日本の説話への適用は、すでに大林良博士によつて、一九七八年の日本口承文芸学会・第一回研究大会の特別講演、「異郷訪問譚の構造」に於いてなされている。

また韓国の説話に対しては、加藤泰氏が済州島の巫俗神話の中から、特に「異世界への旅」というテーマを持つてゐる「使者本解」と「世經本解」を選び、ポップのモデルの適用とパラディグマティックな構造分析の二つの分析を試みている。そこで筆者は、加藤氏が取り上げなかつたその他の韓国の異郷訪問譚の中から、最もティピカルなものとして、ソウル地方の巫俗神話である「パリ公主神話」（異郷は海上の島及び仮の國、即ちあの世）、高麗の始祖王建の祖父「作帝建伝説」（異郷は海中）、「きこりと天女」（異郷は天上）、及び「地下の国怪盗退治」（異郷は地下）等の神話・伝説・昔話を選び、これらの韓国の例についてポップのモデルを適用してみるとこと

にした。

ポップは一九六一年に「兵士としての少女」というルーマニアの昔話の構造分析を行つてゐるが、それによるとこの昔話はその前半と後半とが裏返しの関係になつてゐる。つまり前半に問題となつたいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ同じテーマが問題になつていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとつてゐる。例えば、欠如というテーマが前半に出てくると後半では欠如の除去という形になつてゐるというのである。このポップのモデルが果して韓国の異郷訪問譚に適用出来るか否か、次に具体的に検証してゆくことにしよう。

## 二、パリ公主神話の構造

韓国ではチノギクッ（京畿道）、マンムギクッ（咸鏡道）、オグクッ（全羅・慶尚道）などと呼ばれる死靈をあの世へ送るための死靈祭が現在各地でさかんに行われてゐるが、この際パリ公主（京畿道）、オギブリ（咸鏡道）、ペリテギ（全羅・慶尚道）などと呼ばれる巫祖神話が巫女によつて必ず唱われてゐる。パリ公主の「パリ（卧引）」とは韓国語「卧引」（捨てる）という動詞に由来するものであり、公主は王女の意味であつて、従つて「捨てられた王

女」という合成語である。つまり、この神話の主人公は捨てられた王女であり、この意味から「パリ公主神話」とよばれている。この巫祖神話は地域的に多くのヴァリエーションがあり、すでに多くの研究者によって、またさまざまな地域に於いて調査研究がなされてきたが<sup>(4)</sup>、なかでも特に赤松智城・秋葉隆氏によつて一九三七年に刊行された『朝鮮巫俗の研究』(大阪屋号書店)の中に収録されている、ソウル地方の「パリ公主(捨姫)神話」が最も古くかつ最も典型的なものであつて、現在伝承されているものとほとんど変わることのないで、本稿ではこの赤松・秋葉本を中心として分析することにした。又、この神話については、これは巫祖神話としての入巫過程を示すものであるという説をはじめとして、「死の試練物語」<sup>(6)</sup>であるとか、「魂返しのための靈旅」<sup>(7)</sup>であるとか、「治病過程の原型の象徴」<sup>(8)</sup>であるとか、或いは「末娘勝利譚」<sup>(9)</sup>であるなどさまざまの見解があるが、筆者はこの神話の主人公であるパリ公主が異郷を訪れるという侧面を特に重要視して、今回の一応「異郷訪問譚」の一つとして把え、他の資料を参照しながら分析することにする。

ソウル地方におけるパリ公主神話の概要是次のようなものである。

王の世子が十才になった時、王は世子の結婚に関して巫に占つてもらつた。その時、大開年に結婚すれば三人の息子に恵まれ、閏吉年に結婚すると七人の娘が生まれるといわれた。しかし王はこの占いを無視して、大開年を待つことなく観象監にはかって日定を決めて結婚させた。こうして世子は王位を継承した。

新王の妃は第一子として娘を産んだ。そしてさらに第二子も娘、第三、第四、第五、第六、第七子もみな娘であった。この間ずっと新王は世子を希望してきたが、それがかなわないので非常に怒つて、第七子の末娘を捨ててしまつた。妃はこれを発見して一度は連れもどしたが、王が許さないので、パ

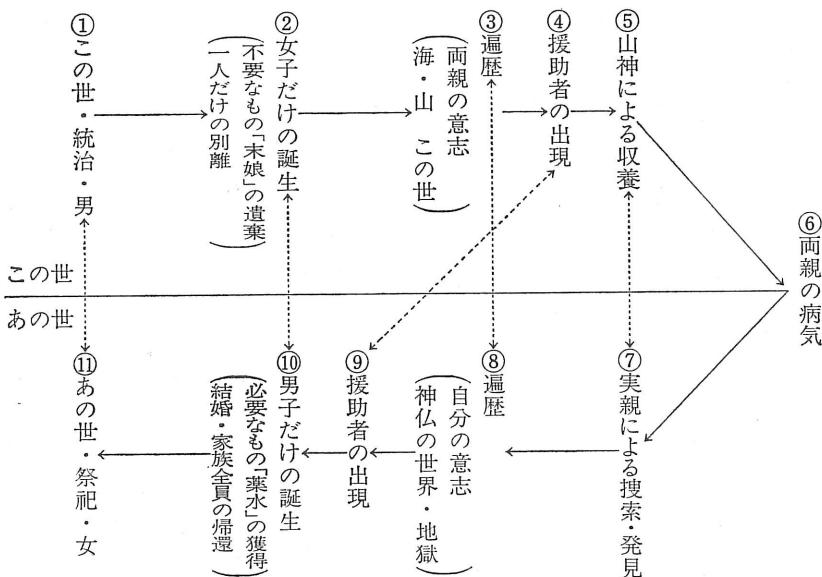
リテギと名づけて玉の函に入れて海へ流し捨ててしまった。亀がその子を運び去つた。その後主人公のパリテギは祝迦世尊に助けられ、山神である守山の乞食功德の翁嫗に授けられて養育された。山神に育てられた主人公は成長して十五才になった時、自分の産みの親は誰か、どこにいるのか山神にたずね知りたがつた。ちょうどその頃では国王夫婦が病氣になり巫に占つてもうと、七番目の娘を捨てたことが原因で二人とも死ぬ病氣であるといわれた。さらに夢の中で、病氣を治すためには、捨てた娘を発見してその娘から不死の薬、薬水をもらって飲むことが必要であると知らされた。そこで臣下を使って方々を捜し、ようやく鶴の導きで主人公を発見し、血を合わせて国王の子孫であることが確認された。主人公は都に帰つて実の親と対面した。この時産みの親である国王夫婦は一人とも危篤状態にあつた。六人の姉娘はそれぞれの理由をつけて断つたにもかかわらず、捨てられていた第七番目の末娘のパリテギは、男装をして薬水を求めて再び旅立つた。パリテギは途中祝迦、地藏、阿弥陀仏などのいる仏の神の世界へ行き、祝迦から呪宝である羅花をもらってそれを使って地獄の門に入る。次に無上神仙のいる所にたどりつき、無上神仙と結婚して七人の息子を産む。七人の息子を産み献じたそのお礼として薬水をもらい、その家族である夫と子供を連れて、川を渡つてこの世にもどつて来た時にはすでに両親は死んで、葬式の列が墓地へ行く途中であった。パリテギは死んだ父母に薬水を飲ませて生き返らせた。そして両親に断わりなく結婚したことなどを詫び、その結婚を認めてもらう。そしてパリテギは巫女になり、無上神仙は亡者の路祭を担当する神になり、祝迦は四十九日時を担当し、七人の息子は仏錢をもらう者(僧)になつたという。

以上がパリ公主神話の概要である。次にこの神話の構造を分析すると、パリ公主神話の全体の構造は第1図に示す通りである。

まずこの神話の発端①のテーマは、世子が王位に就いたことである。つまり巫の占いを無視して結婚して王位を受け継いだことを語つてゐる。統いて②の部分では、占いの通り七人の女子だけが誕生し、世子が生まれないことが語られている。ここでは特に七番目の

### 第1図 パリ公主神話の構造

→ ストーリーの進行  
←-----→ テーマの対応関係



娘である主人公が「望まれぬもの」、或いは「不要のもの」として遺棄されている点が重要である。また棄てられるに際して、家族のうちただ一人だけが流されているのは、家族からの一人だけの分離を表わしていると考えられる。さらに③では主人公の遍歴が語られてゐるが、ここで重要なことはこの遍歴が主人公自らの意志ではなく、両親の意志によるものであること、又、主人公の遍歴する場所がこの世の海や山などであるという二点である。

続いて积迦世尊がこの捨て子を発見して山神の老夫婦に養育してくれるよう頼み、捨て子は山神の老夫婦によって育てられ十五歳に成長するのであるが、ここで重要な点は援助者としての积迦世尊が媒介となって主人公は山神の老夫婦に収養されたことである。一方ででは産みの親である国王夫婦が、七番目の末娘を捨てたことが原因で二人とも病氣になるのであるが、この両親の病気を転回点として話は逆転をはじめ。つまり夢の中でこの病気を治すには捨てた末娘を発見して、その娘から不死の薬である薬水をもらつて飲むことが必要であると知らされる。その結果実の両親によつて末娘の捜索が行われ、主人公が発見されるのであるが、この(7)の部分は前半の(6)の主人公が山神の老夫婦によつて収養されたことと対応している。この時両親は一人とも危篤状態であつたので、末娘は薬水を求めて再び旅立つことになる。この第二の旅では、主人公は地蔵や阿弥陀仏などの居る仏の神の世界や「地獄」など、つまりこの世ではない「神の世界」や「あの世」を遍歴しており、(3)での主人公の遍歴の舞台がこの世の海や山であったことと大きく対立している。さらに第二の旅が主人公自らの意志によるものである点も、(3)の遍歴が主人公自らの意志によるものでなく、両親の意志によるものであつたことと明らかな対照を示すところである。

次に⑨では、主人公は积迦世尊からもらった「羅花」によって地獄へいって無上神仙に会い結婚するのであるが、これは主人公が积迦世尊の媒介によって山神の老夫婦に収養されることになった④の部分と対応していることがわかる。続いて⑩では七人の男子ばかりの誕生がテーマとなって語られているが、これは②の七人の女子だけの誕生と明確なコントラストをなしている部分である。又②では、七人の娘の誕生は「不要なもの」「望まれぬもの」であったのに對して、⑩の場合は必要なもの、つまり「薬水」を得るための前提条件と考えられている。さらに②では主人公一人だけが家族から別離して遺棄されたのに対し、⑩では主人公の家族全員の帰還・両親との再会が語られている点も②と異なるところである。

最後の部分の⑪のテーマは主人公が巫女になったことである。そして家族のうち夫は亡者の路祭を担当する神に、七人の息子は仏鐵をもらう者になつたと語られているが、これは主人公の巫女としての祭祀機能の分化と考えられるので、従つて主人公公があの世での祭祀を担当する巫女になつたということである。これは①の世子がこの世（俗界）の統治者になつたことと対応しており、ともに就任をテーマとしているが、①に於いてはこの世（又は俗・顯の世界）が問題になつてゐるのに対し、⑪ではあの世（又は神靈の世界・幽界）がとりあげられているという相違がある。つまり①ではこの世の統治が世子によつて行われるようになつたことを述べているのに對して、⑪では主人公のパリ公主があの世の祭祀を司ることになつたことが語られているのである。従つて①と⑪には「この世・統治者・男」に対して「あの世・祭祀・女」という明らかなコントラストが認められるのである。

このようにパリ公主神話に於いても⑥の両親の病気を転回点とし

て、前半と後半が裏返しの関係になつていることは確かである。しかし以上考察して來たように、前半部と後半部のそれぞれに對応する項目、即ち第1図の①と⑪、②と⑩、③と⑧、④と⑨、⑤と⑦が逆の順序で次々に展開し、かつ同様のテーマがとり挙げられていることは明らかに認められるところであるが、その内容は単に前半の否定ないし対立というだけではなく、さまざまな變化や対照が認められることがわかるのである。

### 三、作帝建伝説の構造

『高麗史』世家卷一によると、高麗の太祖王建の祖父作帝建について、およそ次のような伝説が記録されている。

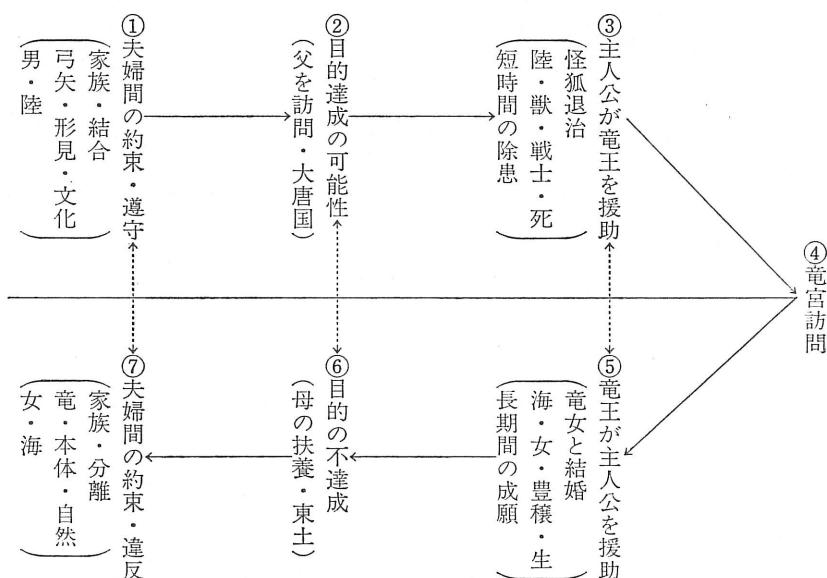
唐の肅宗大王が皇子であった時に諸国を遊歴しようとして天宝十二年（新羅景德王十二年）に海を渡つて沮江の西浦に着き、松嶽郡に来て一ヶ月留る間、辰羲を寵愛した。大王は辰羲との別れに臨み、「男の子を生めばこの弓矢を与えよ」といつて日頃愛用していた弓と矢をひとつそろい置いていった。作帝建は生まれつき聰明で六芸（礼・樂・射・御・書・數）に通じ、さらに弓をよく射たので「神弓」と称された。十六才になるや、父を訪ねようとして船に乗つて航行中、にわかに雲や霧が深くかかるて三日間も動けなかつた。船中の人が占いをしてみると「高麗人を除去しなくてはならない」ということだったので、作帝建は弓矢をもつて海に飛び込んだところ海中の岩の上に立つた。すると雲霧は晴れて船は順風のつて飛ぶようになんだ。やがて老人が進み出て、「自分は西海に住む竜王であるが、毎日申の時間（午後四時）になると老いた狐が出て来て、膽腫經を誦ずると私の頭がひどく痛む。聞くところによると、あなたは弓をよく射るということなので、どうかあの狐を退治して私の災害を除いてほしい」と言った。作帝建は承諾した。やがて狐の現われる時間になるや、空中から音楽とともに西の方から

来るものがあったので、真仏ではないかといふかたが、老人のすすめるま  
に矢を射たところ、果たせるかな、それは老いた狐であった。老人は大変  
感謝しながら、「あなたの力によつて私の災いがとれたから、何か恩返し  
をしようと思う。あなたは大唐国へ行って大王である父親に会おうと思つ  
か。それとも七宝（金・銀・瑠璃・碑葉・瑪瑙・琥珀・珊瑚）をもつて東方へ行  
き、母親を扶養しようと思うか」と言つたので、作帝建が「自分の望むのは東  
土の王になることだ」と言うと、老人は「東土の王になるには必ずその子孫  
から三建（名前に「建」の字のつく人が三人）が出なくてはならない。その  
他のことなら命するまことに何でもする」と答えた。作帝建はその話を聞き、  
まだ時の至らないことを知つて躊躇していたところ、傍にいた老嫗が、「ど  
うしてその娘と結婚しないで帰らうとするのか」と言うので、その眞意をく  
みとつて結婚したいと言つたところ、竜王は娘を与えて彼の妻にした。又、  
彼の帰りに臨み、竜王の神通力の源である「豚」を土産に与えた。

作帝建は竜女をつれて帰國し、松嶽山の付近に永安城を築き宮室を建てた。  
竜女は寝室の外に井戸を堀り、その井戸の中を通りて西海の竜宮と往来して  
いた。竜女はいつも作帝建と約束して、「自分が竜宮へ帰る時にはどうか決  
して覗き見をしないでくれ、そうしないと再び帰って来ない」と言つていた  
が、ある時作帝建はこの約束を破つてひそかに覗いて見た。竜女は侍女とともに井戸に入つて黄竜と化し、五色の雲がたちこめて不思議であったが彼は何も言わなかつた。竜女は竜宮から帰つて来て怒つて「夫婦の道は信義を守  
ることが大切であるのに、あなたは約束を破つたので私は一緒にここでは暮  
せない」といつて四男を残したまま侍女とともに竜に化して井戸に入つてしまい、そのまま帰つて来なかつたといふ。

さて話の発端である第2図①のテーマは夫婦間の約束である。ここ  
では妻が夫との約束を遵守したことなどが語られている。つまり「男  
の子が生まれたらこの弓矢を与えよ」といった夫の言葉を守り、妻  
が夫の形見である弓矢を息子の作帝建に与えている。ここで重要な  
ことは母・辰義によつて、これまで不明であつた父が大唐国の肅宗

第2図 作帝建伝説の構造



大王であることが明らかにされたことである。従つてここでは家族の結合が語られているのである。続いて③は主人公が西海の竜王の頼みによつて老狐を退治したこと、即ち、老狐退治がそのテーマである。竜王を襲つていた狐による災難を主人公が「武力」によつて直ちに除去したこと、つまり主人公が竜王を援助したことが語られている。主人公が「弓矢」をもつて老狐を退治していることは主人公の戦士的機能を明らかに示している点であると思われる。

その後物語は、主人公が狐を退治してやつたお礼として竜宮に招かれたことが語られているが、この主人公の竜宮訪問を転回点として話は逆転をはじめるのである。つまり⑤に於いては主人公の「東土の国王となりたい」という願望を実現するために、今度は竜王が主人公を援助することになる。しかしこの主人公の願望は直ちにかなえられるものではなく、その子孫から三建（名前に「建」の字のつく人が三人）出なければならないという程の長時間の後に、その願望が実現するということを語つており、③で主人公が竜王を老狐の災害から「直ち」に助けていた点と対照的である。次に竜王が作帝建に贈ったものの内容をみると、竜女（娘）及び七宝、竜王の神通力の源泉である「豚」がそれである。なかも竜女が妻として与えられていることは、③で老狐が主人公によつて退治されたことと対応する。つまり竜女との結婚は「生産」を表わしているのに対して、老狐退治は「死」を表わしている。また竜女が宇宙領域の中では「海」に属するものに対するものに対し、狐は「陸」に属している。さらに竜王が主人公に与えた「七宝」は「富」「豊穣」を表わすものであり、さらに金・銀・瑠璃などの鉱物であるところから「自然」を表わしており、③で主人公が「弓矢」「武力」即ち「文化化」をもつて竜王を援助したことと対照的である。さらに竜王の神

通力の源泉である「豚」が主人公に贈られているが、これは海を支配する竜王の「呪宝」であると考えられるので、③の「弓矢」の表わしている軍事機能とは対立的である。つまりここに於いて、作帝建は竜王から海の統治権を与えられたことになり、この伝説の性格が「高麗王朝の始祖神話の一端」であることを見事に特徴づけている。即ち高麗の始祖王建は宇宙三界を支配する普遍王としての資格の一端である海の統治権を、祖父作帝建によつてもたらされていふことを語つているのである。続いて⑥では主人公の故郷への帰還が述べられていて②と対照をなすものである。②に於いては父に会うという目的の可能性をもつて主人公は出発しているが、ここでは主人公のこの目的は不達成に終り、その代替物として東土の母親の扶養が課せられている点が異つてゐる。最後の⑦の部分ではいわゆるマルジーネ型の挿話が語られているが、ここでは①と同様再び夫婦の間の約束がテーマとなつてゐる。つまり竜女が竜宮へ帰る時は決して覗いてはならないという夫婦間の約束を、夫である作帝建が破つてしまつたことにより夫婦・家族が別離することになる。つまり①で妻が夫との約束を守つたことにより家族が結合に向つたと至極対照的であるといえよう。また①では夫の「形見」である「弓矢」が問題になつてゐるのに對して、⑦では竜女の「本体」である「竜」が問題になつてゐる。つまり「弓矢」が植物で作った武器であることから「文化」に属しているのに對して、「竜」は「自然」に属している。さらに大唐国が宇宙領域としては「陸」に属しているのに対しして「竜宮」は「海」に属しているというように、約束の遵守―約束違反、家族の結合―家族の分離、形見・弓矢・文化―本體・竜・自然、大唐国・陸―竜宮・海などいくつかの対立が求められるのである。

即ち、このように作帝建伝説に於いても、図中の④の主人公の竜宮訪問を転回点として、前半と後半が裏返しの関係になつてゐるところが分る。そして前半と後半のそれぞれの対応する項目、つまり①と⑦、②と⑥、③と⑤に於いては同様のテーマがとりあげられるのである。

#### 四、きこりと天女（離別型）の構造

次に主人公が訪れる異郷が天上である例として、韓国の説話の中で最もティピカルなもの一つである、きこりと天女の昔話を取り上げることにする。韓国に於けるこの系統の昔話には三種のタイプがある。即ち天女の妻と別れる離別型、後に夫が天に昇つて妻子にめぐり会い幸福に暮らすという幸福型、さらに夫が天に昇つたが難題を授かり失敗して悲運に終る難題型の三つである。<sup>(1)</sup>さらにこの昔話は金剛山、八仙女、羽衣伝説、雄鶏伝説など伝説としても伝承されている。ここではそれらの中から離別型の昔話を例として取り上げることにしよう。

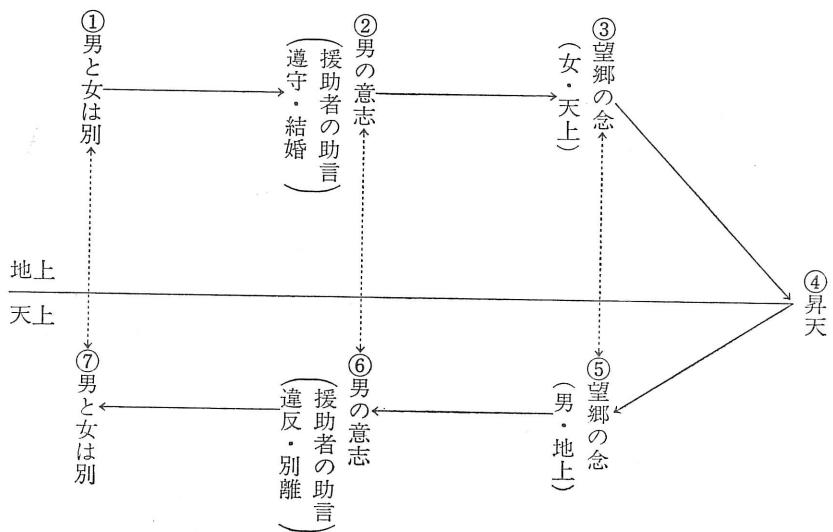
一人のきこりが狩人に追われている鹿を隠して命を救つた。鹿（実は山神靈）はそのお礼として天女が泳いでいる場所を教えてくれた。果たしてそこでは天女達が泳いでいた。きこりは鹿のいう通り羽衣を隠した。泳ぎが終つた天女達が泳いでいた。きこりは鹿の隠された一人は帰れなくなつた。きこりは彼女を家に連れてきて妻にした。きこりの妻になった天女は子供を三人産んだ。ある日きこりは隠しておいた羽衣をみせてやつた。天女はそれをみると子供を三人従えて昇天してしまつた。きこりが山に行くと鹿が現われ、子供が四人産まれる前に羽衣を見せてはいけない、という約束を破つたのだから仕

方がないといって、天から池の水を汲みあげるつるべが降りるときそれに乗つて昇れば妻子にめぐり会えると教えてくれた。鹿に教えてくれた通りにして昇天に成功したきこりは、しばらく妻子と楽しく暮らしていたが地上の老母が恋しくなつた。妻は夫に龍馬を与えて地上に行つても龍馬から絶対に降りてはいけないと念をおした。地上の母は息子が好きなカボチャ粥を食べさせたところ、熱い粥が龍馬の背にこぼれ、龍馬はびっくりして前脚をあげた。そのためきこりは地上へ落ちてしまい、龍馬は昇天してしまつた。きこりはついに天に帰ることが出来ず、常に天を眺めながら死んだ。だから彼の靈は雄鶏になつたのだという。

さてこの話の構造を調べてみると第3図に示すように、はじめにきこりと天女、つまり①男と女は別々にいる。そして男が鹿を助けてやつたことを契機に二人は出会う。そして男が女の羽衣を盗むことになるが、ここに②男の意志が反映する。つまり羽衣を隠すという行為は援助者である鹿（山神靈）の助言を男が遵奉したことであり、その結果二人は結婚することになる。そして子供が三人も産まれたが天女の望郷の念は強く、きこりが羽衣を見せた途端子供を連れれて昇天してしまつた。ここでは天女の天上に対する③望郷の念が強調されていることに注意したい。次に男も妻子の後を追つて④昇天する。

この男の昇天を転回点として話は逆転をはじめる。しばらくの間天上で妻子と楽しく暮していたが今度は男が地上の老母が恋しくなる。この⑤の男の地上（の母）に対する望郷の念は、③の天女の天上に対する望郷の念と対照的である。地上に降りた男は、龍馬から絶対に降りてはならないという援助者である天女（妻）の助言に違反して、母の作ってくれたカボチャ粥を食べることによつて龍馬から落ちてしまい、その結果天上へは戻れなくなり天女とは別離することになる。カボチャ粥を食べることは男の意志であり、それによつ

第3図 きこりと天女の構造



て夫婦、つまり男と女は再び別々になってしまふ。②と⑥では男の意志というものがテーマになっている点は同様であるが、援助者の助言に對して、②ではそれを遵奉する形をとっているのに對して⑥では違反する形をとっている。さらにその結果②では天女との結婚、⑥では別離になっており、互いにコントラストをなしていることが分る。又この昔話の前半の舞台は地上であり、後半の大部分は天上であることも対照的である。

以上考察して來たように、このきこりと天女の昔話の構造は、④の男の昇天を転回点として前半と後半とが裏返しの関係になつてゐることは明らかである。しかし第3図中の①と⑦、②と⑥、③と⑤のように確かに前半と同じテーマが後半にも出て来るが、ポンプの例のように前半と同じテーマが後半にも出て来る場合、後半では必ずしも全てが前半の除去ないし否定という形をとつてゐるわけではないことがわかる。しかしこの韓国のかこりと天女の例からも明らかに、何れかの形で同様のテーマが前半と後半では意味や形を異にして現われてゐることは事実であるといえよう。

## 五、地下の國怪盜退治の構造

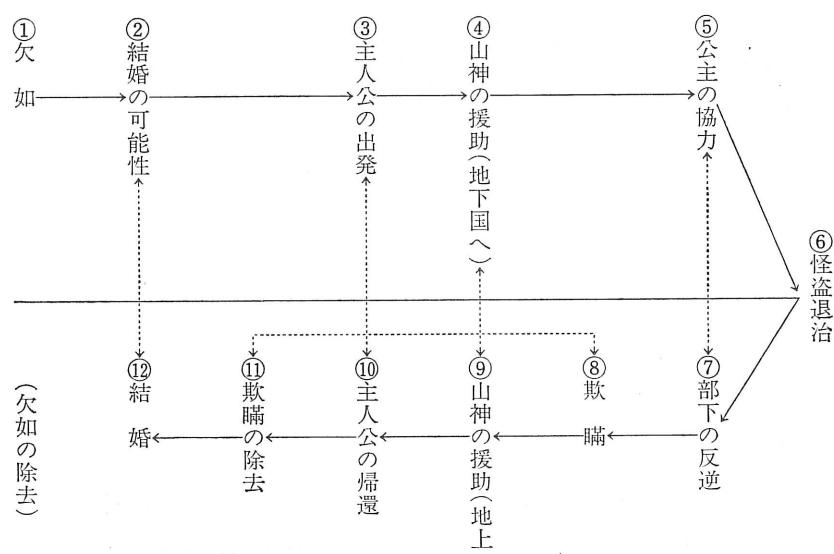
地下の國怪盜退治説話は、地下の國の怪盜を退治してさらわれた公主(あるいは妻)を救出して結婚する、いわゆるアンドロメダタイプまたはペルセウス英雄説話型に當るものであるが、本稿では特に主人公がさらわれた公主を救出するため地下の異郷へ行くという側面に注目して、この説話を異郷訪問譚としてとりあつかうことにする。世界的な共通モチーフであるこの系統の話で、特に韓国的な著しい特徴は怪物の居る場所が地下の國であるという点である。韓

國の地下の國怪盜退治説話の概要は次のようなものである。  
(13)

地下の國の怪盜が三人の公主を誘拐した。救出した者は聲に迎えるという王の御触れが出された。一人の若武士が王の部下三人を従えて救出に出てかけた。しかし、地下の國の入口へ通じる道が分らなくて悩んでいたとき、山神靈が現われ夢で教えてくれた。深い地下への入口を発見して若武士一人が入つていった。彼は三人の公主に会い公主の協力を得て、怪盜の眠っている間に退治する準備を整えた。彼は怪盜の首を切り、そして三人の公主を地上へ出すことに成功した。しかし、部下達が大きな石で地上への出口を塞いで行つてしまつたので彼は地下の國から脱出することが出来ず、地下の國を逼陥する。彼は再び山神靈の援助により地上に戻り王の宮殿に向つた。三人の部下達は公主を救出したのは自分達の功績だといってそれぞれ公主と結婚しようとしていた。若武士が現われて眞実が知れたので王は部下達を懲罰し彼は末の公主と結婚した。

さて、この話の発端第4図①では怪盜が公主をさらつていったことが述べられている。従つてこの部分は一応欠如とすることが出来よう。続いて②では公主を救出した者は聰に迎えるという王の御触れが出来ているが、これは主人公にとっては結婚の可能性が生じたことを意味する。③の部分では主人公の若武士が王の三人の部下を従えて公主を救出に出发することが語られ、後半部で部下の反逆のため地上へ脱出することが出来なくなることや、部下の欺瞞にあう伏線になつてゐる。④では主人公が地下の國の入口へ通じる道が分らなくて悩んでいると、山神が現われ夢で入口へ通じる道を教えてくれる。この部分を一応山神の援助とする。地下の國へ入つた主人公は地下の國をさまよつたあげく、ついに怪盜の住家をつきとめ主人公の協力を得ることになるがこれが⑤の部分に當る。そして⑥では怪盜を退治して見事に公主を救出することになるのであるが、これを転回点として話は逆行をはじめるのである。つまり主人公は部下

第4図 地下の國怪盜退治の構造



の反逆に会い地上への脱出が不可能となるのであるが、これは⑥の部分で、主人公が公主の協力を得て怪盗を退治しているのと対照を示すものであるといえよう。一方、部下達は公主を王の前に連れてゆき自分達の功績に仕立てるのであるが、この部分を欺瞞とするところとする。一方地下の國にとじ込められてしまつた主人公は、地下の國の出口を見つけてさまよつているうちに、再び山神の助けを得て地上に出ることが出来た。これは話の前半の④の部分で、主人公が山神の援助を得て地下の國へ行くことになったことと明らかなコントラストをなしている。さらに次の⑨の部分では主人公が一人で帰還したことが語られているが、これは話の前半部の③のところで主人公が王の部下三名を従えて出発したことと対照を示している。又、主人公の若武士の帰還によって部下達の功績が欺瞞であることが判明し、ここに⑧の部分のテーマである欺瞞が除去されることになる。

さらに⑩の主人公と末の公主の結婚は、話の前半部の②の部分で、公主を救出した者を聟にするという王の宣言によつて、主人公が結婚に対する可能性をもつたことと対応することになる。この⑧の欺瞞および⑩の欺瞞の除去の部分は両者とも話の後半部に属しているので、話全体の中で構造的対立関係にあるとはいえない。恐らくこの部分は後になって挿入されたものであつて、そのため話の発展上に於ける位置は流動的なのであるう、と考えてよいのではなかろうか。この話は主人公と公主の結婚という部分をもつて一応完結しているが、第4図を見る限りでは、①の欠如の部分に対応する欠如の除去を語る部分があつてもよいことになる。

以上の考察からも明らかのように、この地下の國怪盗退治説話は⑥の怪盗退治の部分と転回点として②と⑫、③と⑩、④と⑨、⑤と⑦のように、前半部と後半部がそれぞれ対立関係になることを表わ

していることが分る。しかし、だからといってポップの例のように必ずしも前半部の除去ないし否定という形になつてゐるわけではないが、第4図を見ても明らかのように、同じテーマが前半部と後半部では意味や形は異つてゐるが、必ず何らかの形をとつて現われていることは確かであるといえるだろう。

## 六、おわりに

以上韓國の異郷訪問譚のなかからパリ公主神話、作帝建伝説、きこりと天女、地下の國怪盗退治等若干の例を選んでポップのモデルが適用されるか否か検証してきたのであるが、その結果、物語の前半部と後半部が裏返しの関係にある構造は、韓國の場合、大林博士が検証した日本の例と同様に、昔話ばかりでなく神話や伝説にも共通してみられる構造であるといふことが指摘出来ると思われる。又、ポップが分析した例では、前半部と同じテーマが後半部で出て来る場合、後半部では前半部の除去ないし否定という形式をとつてゐるのに對して、韓國の例の場合、何らかの形で同じテーマが前半部と後半部に現われていることは明らかであるが、後半部に同じテーマが再び取り扱われる場合には、必ずしも全ての例が前半部の否定や除去ないし対立という形式をとるとは限らないといふことが言えるのではないかと思われる。

今回取り上げた四例は韓國の異郷訪問譚のうちのごく一部にしか過ぎない。従つてこのような構造が他の異郷訪問譚にもみられるかどうか、又、このような構造をもたない異郷訪問譚はどのような構造をもつてゐるのかという問題については今後の課題となしたいと思

(2) Popp, Mihai 1967 'Metode noi in ceretarea structurii bas-

meior', in : Folklor Literar, I : 5—11 (独訳 Neue Methoden zur

Erorschung der Struktur der Märchen, in : Felix Karlinger  
(hrsg.), Wege der Märchforschung (Wege der Forschung,  
CCCV) : 428—439, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darm-

tadt.

(2) 大林太良 一九七九「黒郷訪問譚の構造」『□承文芸研究』第2号 | 一九

(3) 加藤泰 一九七九「濟州島の110の神話の構造分析」『民族学研究』四

四一、八三—九〇

(4) 金東旭 一九六〇『黃義敦先生古稀記念史學論叢』任哲等 張善根

一九六五『閔北地方巫歌』金泰坤 | 一九六六『黃泉巫歌研究』任哲等

張善根 | 一九六七『京畿道地藏巫歌』崔吉城 | 一九六九『全國民俗総

合調査報告書』(全南篇)「巫俗」任哲等 | 一九七〇『苦浦巫歌』金泰

坤 | 一九七一『韓國巫歌集』崔吉城 | 一九七二『全國民俗総合調査報

告書』(慶南篇)「巫俗」

(5) 秋葉隆 一九五〇『朝鮮巫俗の現地研究』一一一—一三一

(6) 柳東植 一九七七『韓國巫教の歴史○構造』一一六

(7) 松前健 一九六九『日本神話の新研究』一七六

(8) 奈符永 一九七〇「死靈」巫俗的治療に対する分析心理学的研究』『月

刊最新医学』十二一、九三

(9) 崔仁鶴 一九七四『朝鮮昔話選』一一〇 |

(10) 崔吉城 一九七六「韓國巫俗における死靈祭と靈魂觀—捨姫公主神話の構造分析—」『朝鮮学報』第七十八輯 | 一九一—四四

(11) 崔仁鶴 一九七六『韓國昔話の研究』一一一六

(12) 大林太良 一九七六『日本の神話』一四八—一五一、奄美大島の天人女  
戸音話の構造を参考に分析した。

(13) 孫晋泰 一九三〇『朝鮮民謡集』一六五—一八一、崔仁鶴 一九七四

『朝鮮昔話百選』一一〇七八—一一一、回 | 一九七六『韓國昔話の研究』一

| 一七一—一九參照

<sup>14)</sup> 例えば「尚州五福源」のみたいな黒郷を神仙世界とする韓國の黒郷訪問譚

にせりのよつた構造は認められない。  
(みだ らせり・郡山女子大学)